

地域おこし協力隊 活動記 Vol.113



評論家の林達夫の言葉を引用して、
・違和感を持ち続けること
・仕事の場をアマチュア精神で行くことの重要性を強調しました。

大学の講義／協力隊研修での講演業務
柴田学園大学の「学園と地域」、弘前大学の「地域の社会・文化―地域社会の創造と教育―」という授業で講演してきました。講演と聞くと偉そうな感じがしますが、要は経験談を話すというものです。移住した経緯から、協力隊としてどんな活動をしているのか、どう思うか、取組んでいるのかなどを話しました。思いのほか、90分の講義時間があっという間に過ぎました。話す側の体感時間は早かったですが、聴講する学生は退屈だったことでしょうか（笑）

県の「令和7年度地域おこし協力隊初任者研修会」では、先輩隊員による活動事例発表ということで講演してきました。これまた高説を垂れている感じがしますが、初任者に対して活動内容とアドバイスを話すというものです。着任当初は手始めに、地域の歴史書、例えば『相馬村誌』や『弘前市史』のようなものを読んで、地域理解から始めるのがよいのではないかと伝えてきました。

今年度は、青森大学、國學院大學、法政大学、明治大学の学生を受け入れます。りんごの農作業を中心に、農カフェ開業のアイデア出しやお山参詣の準備に参加してもらう予定です。

20年前の宮口氏の言葉を引用して終わります。

「大学院生を含む学生の中には、専門的



ロマントピアでの宮口ゼミ歓迎会（2015年）

地域づくり学生インターンの学生と顔合わせ
9月に2週間ほど、あおもり型農村RMO育成事業の一環で、地域づくり学生インターンを受け入れます。イメージとしては、1992年から2016年まで毎年受け入れてきた宮口侗迪ゼミナール（早稲田大学）のような感じですかね。

な視点から地域にインパクトを与えられるものもあるし、若者の素直な感性からの提案にも価値がある。しかし、単に未熟な学生であつても、地域にもたらす効果は計り知れない。赤の他人の受け入れ方を工夫し、面倒を見るといことは、地域の人たちにわかりやすい共同作業が生まれるということである。そして活動に第三者が加わることによって、きちんとした説明が必要になる。いいところを見せて、もうひと頑張りしようという人も出てくるであろう。これらのことは絶対に地域社会の力量を高め、新しい力の育成につながる。長く似たような顔ぶれで歩んできたわが国の地方社会が、未曾有の転換期にある今の時代に発展の契機をつかむには、異質の力との交流が不可欠といつてよい。」

「地域づくりインターンの意義―全国町村会―」宮口侗迪



地域づくりインターンの会の「派遣地決定会」で、有望（そう?）な学生をスカウトしてきました。どんな学生が来るかは後日共有します。

